

歌唱教材の音高が幼児の歌唱の正確さに与える影響

吉 富 功 修

(本学名誉教授)

三 村 真 弓

(本学大学院教育学研究科)

伊 藤 真

(本学大学院教育学研究科)

井 本 美 穂

(本講座大学院博士課程後期在学)

The Effect of Singing Material's Tonal Pitches on Singing Accuracy of Young Children

Katsunobu YOSHITOMI Mayumi MIMURA Shin ITO Miho IMOTO

Abstract

Survey of the singing voice of 4-5-year-old children was carried out in a nursery school on August 2nd and November 15th. In the survey, 5 songs were sung by all the members in each age class. Singing voice of each child was recorded on the IC recorder which was attached to each child and was analyzed. At the survey in August, both 4 and 5-year-old classes had two songs with D5 as the highest pitch. In September, both classes exercised one song with C4 as the highest pitch and 4 songs with B4 or lower pitch. In October, plays like “Call one’s name game” and “Singing game of insect or animal” were additionally introduced to the exercises. The pitches and rhythms of these plays were set as A4-G4-A4-V and Tan - Tan - Tan - ♪ (♪♪♪♪). As a result, both 4 and 5-year-old children’s singing skill was significantly improved.

1 はじめに

幼児の歌唱の実態は多様である。大人顔負けにこぶしを効かせて見事に演歌を歌う幼児もいれば、どなり声で、モノトーン (monotone) で、あるいはつぶやくように歌う幼児もいる。こうした個々の幼児の歌唱の実態を知ることは、幼児教育・音楽教育に携わる者にとって必要不可欠である。

幼児の歌唱の正確さは、歌唱教材を構成する音高によって大きく左右される。幼児には、歌唱に習熟していない者が多い。そうした歌唱スキルの習熟度の低い幼児は、歌唱できる音高の範囲、つまり声域が狭小である場合がほとんどである。とりわけ、高い音高 (以下、高音) を歌えない者、あるいは歌いにくい者が多い。そうした幼児のなかには、ある高音が歌えなかった、あるいは歌いにくかった場合に、その高音につまずくだけでなく、その高音以降の音高にも混乱してしまう、あるいは自分が楽に歌唱できる調に移調してしまうなどして、つまずきが継続する場合がある。本研究は、クラス集団での歌唱における1人ずつの幼児の歌声を調査することによってその実態を明らかにし、歌唱教材の最高音を下げることによって、幼児の歌唱の正確さがどのように変化するかを解明することを目的とする。

2 調査対象保育園

調査対象とした富山県高岡市の国吉光徳保育園は、「ふしづくりの教育」を実践している園である。同園は、昭和54年から岐阜県高山市の中村好明氏と、好明氏のご子息である中村隆夫氏の指導を受けている（中村好明氏は、岐阜県古川小学校の「ふしづくりの教育」に主たる指導者として関わり、さらに自身も久々野町立大西小学校長、同小学校付設大西保育園長、丹生川町立丹生川小学校長、高山市立南小学校長として「ふしづくりの教育」を実践した第一人者である）。さらにこの園は、絵画制作にも素晴らしい成果をあげている。園舎の壁面には、子どもらしい造形と色彩豊かな絵が、ところせましと掲示されている。さらに、郷土の伝統芸能である「獅子舞」の踊りと和太鼓の演奏も活動に組み込まれている。総定員70名の小規模園であるが、子どもの心と手と声を重視する壮大な夢をもった園である。

3 2つの調査の内容と分析

第1回調査・第2回調査ともに、同園の遊戯室でのクラス歌唱の際に、各幼児のポケットにICレコーダー（OLYMPUS Voice-Trek V-41）をセットし、外付けのタイピンマイクを胸元に取り付けて録音した。そのクラス歌唱は、A保育士が指揮し、B保育士がピアノ伴奏した。

(1) 第1回調査

1) 第1回調査の概要

第1回調査は2013年8月2日に行われた。第1回調査に至るまでの歌唱教材の選曲や練習方法等は、すべて同園に一任されていた。4歳児の調査対象者は13名、5歳児の調査対象者は20名である。第1回調査の年齢別のクラス集団での歌唱は、日頃の保育で歌っている曲を中心に行われた。4歳児では《ほたるこい》（わらべうた、最高音B4）・《いちばんほし》（文部省唱歌、生沼勝作詞、信時潔作曲、最高音B4）・《みずあそび》（東くめ作詞、滝廉太郎作曲、最高音D5）・《かたつむり》（文部省唱歌、最高音D5）・《かえるの合唱》（岡本敏明作詞、外国曲、最高音A4）の5曲、5歳児では《ほたるこい》（わらべうた、最高音B4）・《ひらいたひらいた》（わらべうた、最高音D5）・《とんぼのめがね》（額賀誠志作詞、平井康三郎作曲、最高音C5）・《たなばたまつり》（えほん唱歌、最高音D5）・《かえるの合唱》（岡本敏明作詞、外国曲、最高音A4）の5曲、が歌われた。4歳児が歌唱した曲の最高音は、A4 = 1曲、B4 = 2曲、D5 = 2曲であった。5歳児の歌唱した曲の最高音は、A4 = 1曲、B4 = 1曲、C5 = 1曲、D5 = 2曲であった。それらのなかで評価の対象とした曲と、開始音・最高音・終止音の音高を表1に示す。

表1 調査1の歌唱の評価箇所とその音高

4歳児	《みずあそび》			《かたつむり》			《かえるの合唱》		
	開始音	最高音	終止音	開始音	最高音	終止音	開始音	最高音	終止音
	D4	D5	G4	A4	D5	D4	C4	A4	C4
5歳児	《ひらいたひらいた》			《とんぼのめがね》			《かえるの合唱》		
	開始音	最高音	終止音	開始音	最高音・終止音		開始音	最高音	終止音
	A4	D5	A4	C4	C5		C4	A4	C4

評価基準は、5 = 最後までぴったり合っている、4 = 5と3の間、3 = 半分くらい合っている、2 = 3と1の間、1 = まったく合っていない、である。

2) 第1回調査の曲別の検討

まず、4歳児を示す。

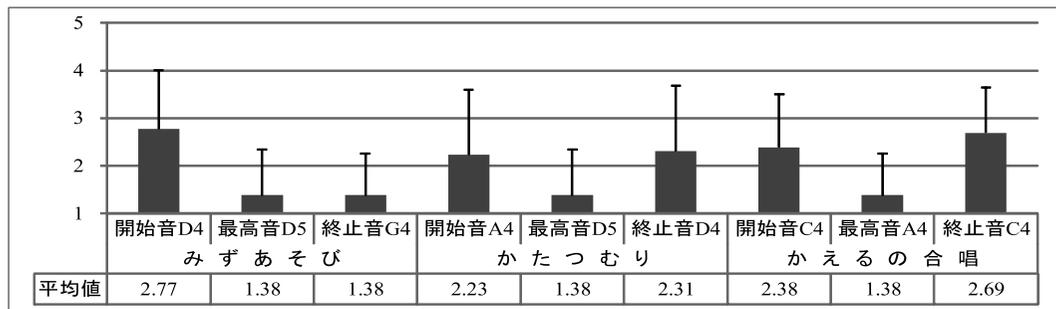


図1 第1回調査4歳児の曲別の平均値と標準偏差

《みずあそび》の3つの音高を検討する。最高音D5は、終止音G4の直前に位置している。このD5という音高は、ほとんどの4歳児にとって、発声することが非常に困難な音高である。一方、G4という音高は、比較的楽に発声できる音高である。ところが、このG4のポイントは、評価した音高のなかで最も低くなっている。その要因としては、直前に位置するこの最高音D5が正しく歌えなくて、その混乱の影響が直後の終止音G4にまで及んだために、ポイントが低くなったためであると考えられる。

つぎに《かえるの合唱》を検討する。開始音C4と終止音C4に比して、最高音A4のポイント(1.38)が非常に低い。同じ音高である《かたつむり》の開始音A4の2.33と比較してもおよそ1ポイントも低い。このことには次のような要因が考えられる。《かえるの合唱》では、「ドレミファミレドV、ミファソラソファミV」のように、順次進行で上行してA4(ラ)に到達する。開始音C4は、地声でのみ発声できる音高である。ところが、最高音A4は、ほとんどの幼児にとって地声よりも頭声での発声容易な音高である。つまり、開始音から最高音に至る順次進行のどこかで、地声から頭声への声区の変換(vocal register change)が必要となるわけである。この声区の変換が円滑に行えなかったために、このような低いポイントになったと考えられる。事実、《かたつむり》の開始音A4は、いきなり頭声で発声するために声区を変換する必要がなく、より高いポイントとなったのである。

このように、4歳児の歌唱のスキルは、いまだに未熟な部分が多い。

つぎに、5歳児を示す。

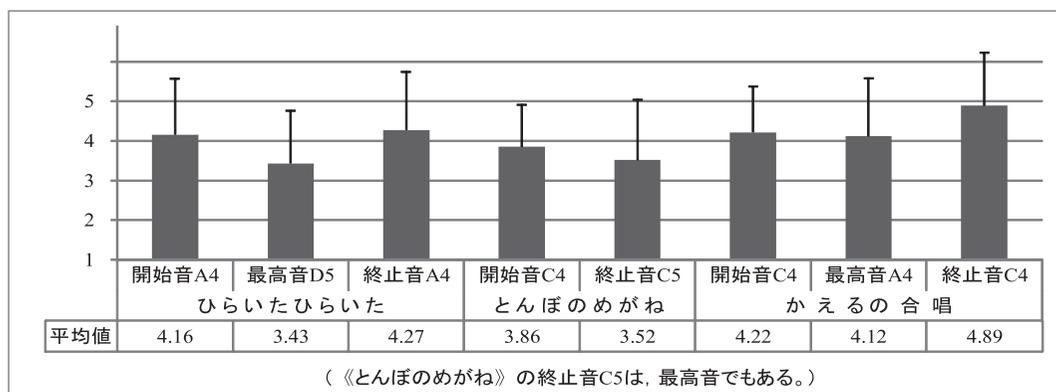


図2 第1回調査の5歳児の曲別の平均値と標準偏差

一見して、4歳児に比べて格段にポイントが高くなっている。ポイントが最も高いのは、《かえるの合唱》の終止音C4の4.89であり、《ひらいたひらいた》の終止音A4の4.27、《かえるの合唱》の開始音C4の

4.22, 《ひらいたひらいた》の開始音 A4 の 4.16, 《かえるの合唱》の最高音 A4 の 4.12 と続く。逆に、相対的にポイントが低いのは、《ひらいたひらいた》の最高音 D5 の 3.43, 《とんぼのめがね》の最高音・終止音 C5 の 3.52 である。いずれも、高音のポイントが低くなっている。

4 歳児でみられた、最高音が正確な音高で歌えなくて、その後混乱する状態や、声区の変換が円滑に行えないことも、若干克服されている。そのことは、評価の箇所間のポイントが平準化されていることにもてとれる。

しかしながらこの図 2 は、図 1 と比較すると相対的にポイントが高くなっているだけであり、問題点も多い。第 1 に、《ひらいたひらいた》の最高音の D5 と《とんぼのめがね》の最高音の C5 のポイントが、3.43 と 3.52 であり、共に低いことである。第 2 に、3 回評価された C4 の評価に安定性がないことである。とくに《とんぼのめがね》の開始音 C4 のポイントが 3.86 と低いことである。その原因は、つぎのように説明できる。《とんぼのめがね》の直前に歌われた第 1 曲《ほたるこい》と第 2 曲《ひらいたひらいた》は共にわらべうたであり、A4 で開始し A4 で終止する。これらの曲のなかで幼児にとって歌いやすい音高は、前者では E4 が 2 回、後者では E4 が 3 回だけである。それ以外はすべて G4 以上の高い音高で歌い続けている。その直後に《とんぼのめがね》が開始音 C4 で始まるのである。この大きな落差について行けない幼児がかなりの数いたのであろう。事実、最後の《かえるの合唱》の開始音 C4 は、4.22 と高いポイントとなっている。5 歳児であっても、このように、あらゆるケースに柔軟に対応できるような歌声の獲得にはいまだ至っていないと考える。

3) 4 歳児と 5 歳児の比較：《かえるの合唱》

つぎに、4 歳児と 5 歳児を比較する。4 歳児と 5 歳児が共通して歌った《かえるの合唱》についてのみ比較する。

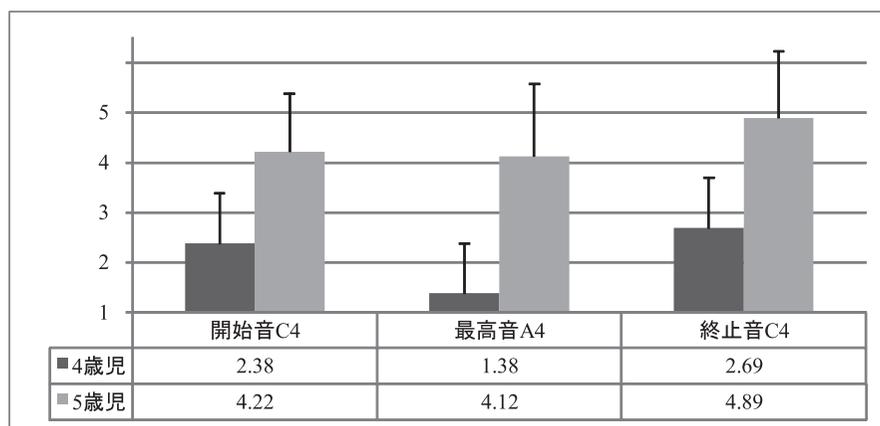


図 3 4 歳児と 5 歳児の比較：《かえるの合唱》

4 歳児よりも 5 歳児のポイントの方が顕著に高くなっている。その差は、最高音 A4 (2.74) > 終止音 C4 (2.20) > 開始音 C4 (1.84) となっている。4 歳児にみられた声区の変換でのつまづきが 5 歳児ではかなり改善されている。

4) 第 1 回調査の個人別の検討

第 1 回調査の結果を年齢別・個人別に示す。まず、4 歳児を示す。平均値と標準偏差は、評価対象とした 9 箇所のものである。

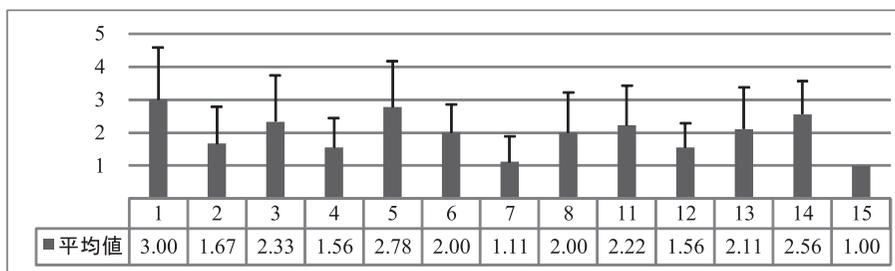


図4 第1回調査の4歳児の個人別の平均値と標準偏差

No.7と15の個別の歌声を聴くと、両者は完全な「monotone」であった。さらに、1ポイント台の他の3名もその傾向が強い。これら5名には、適切な個人別の指導が不可欠である。

つぎに、5歳児を検討する。平均値と標準偏差は、評価対象とした8箇所のものである。

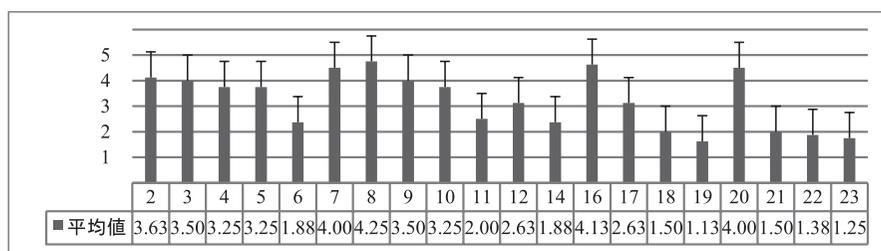


図5 第1回調査の5歳児の個人別の平均値と標準偏差

図5を見ると分かるように、低ポイント群8名（2ポイント以下）、中ポイント群8名（2.6～3.6ポイント）、および高ポイント群4名（4～4.2ポイント）に3分されている。このなかで低ポイント群8名が問題である。この8名という比率（40%）は、4歳児の2ポイント以下の7名という比率（46.15%）とそれほど大差なく、そのポイントの水準も同等である。年齢的な発達という点を考慮すると、問題の重要性がより明確になるであろう。つまり、5歳児の低ポイント群には、年齢的な歌声の発達がまったく認められないのである。この要因として、つぎのことが考えられる。つまり、クラス全員での歌唱だけを聴いていると全体的に上手に歌えているように聞こえるが、実際には、しっかり歌えている幼児は比較的に大きい声で歌っているが、一方、自分の歌声を何だか変だなと感じ、不安をもっている幼児は相対的に小さい声で歌っている。したがって、クラス歌唱では、しっかり歌えている幼児の歌声が支配的となるために、全体的に上手に歌えているように錯覚してしまうのである。このような状態のもとで、指導者は、ともすると歌えていない幼児のことを見過ごしがちになってしまうと考えられる。このように、集団でのクラス歌唱を聴いただけでは、今回の調査の様な個々の幼児の歌唱の実態は把握できないのである。

つぎに、標準偏差を検討する。低ポイント群の6、11および中ポイント群の12、17の幼児は、標準偏差が大きい。彼らは歌声として安定的には定着していないけれども、どうにか指定された音高で歌える部分もある幼児である。かれらは、ほんの少しのきっかけで、より大きな柔軟性を獲得し、高ポイント群に移行する可能性が大である。適切な個人別の指導が望まれる。

(2) 第2回調査

1) 第2回調査の概要

第2回調査は2013年11月15日に行われた。4歳児の対象者は15名、5歳児の対象者は23名である。

9月から、歌唱教材の選択基準を、できるだけ最高音がA4かB4の曲にする、やむをえず最高音がC5の曲を選ぶ場合には1曲のみとする、としてもらった。

10月からは上記に加えて、A4-G4-A4-Vの音高をタン・タン・タン・ウン(♪♪♪)のリズムで歌う、「なまえよびあそび」と「なまきねあそび」も加えて実践してもらった。

第2回調査のクラス歌唱の曲は、4歳児では、《まつぼっくり》(廣田孝夫作詞、小林つや江作曲、最高音A4)・《山の音楽家》(水田詩仙作詞、ドイツ民謡、最高音A4)・《大きな栗の木の下で》(作詞者・作曲者不詳、最高音B♭4)・《だれの手》(古宇田亮順作詞、田中常雄作曲、最高音C5)・《かえるの合唱》(岡本敏明作詞、外国曲、最高音A4)の5曲であった。5歳児では、《きのこ》(作詞・作曲、芸術教育研究所、最高音B♭4)・《まつぼっくり》(廣田孝夫作詞、小林つや江作曲、最高音C5)・《空にらくがきかきたいな》(山上路夫作詞、いずみたく作曲、最高音B4)・《こぎつね》(勝承夫作詞、ドイツ民謡、最高音B♭4)・《かえるの合唱》(岡本敏明作詞、外国曲、最高音A4)の5曲であった。

8月2日の歌唱に比して11月15日の歌唱では最高音が低くなっている。それらを表にして比較する。

表2 第1回調査と第2回調査の歌唱教材の最高音の比較

4歳児	第1回	《ほたるこい》 B4	《いちばんぼし》 B4	《みずあそび》 D5	《かたつむり》 D5	《かえるの合唱》 A4
	第2回	《まつぼっくり》 A4	《山の音楽家》 A4	《大きな栗の木の下で》 B♭4	《だれの手》 C5	《かえるの合唱》 A4
5歳児	第1回	《ほたるこい》 B4	《ひらいたひらいた》 D5	《とんぼのめがね》 C5	《たなばたまつり》 D5	《かえるの合唱》 A4
	第2回	《きのこ》 B♭4	《まつぼっくり》 C5	《空にらくがき…》 B4	《こぎつね》 B♭4	《かえるの合唱》 A4

最高音がD5の曲は、第1回調査では、4歳児では2曲(《みずあそび》と《かたつむり》)、5歳児でも2曲(《ひらいたひらいた》と《たなばたまつり》)あったが、第2回調査では、筆者たちの要望によって、最高音がD5の曲は無くなっている。第2回調査での最高音は、4歳児ではC5が1曲(《だれの手》)、B♭4が1曲(《大きな栗の木の下で》)、A4が3曲(《まつぼっくり》・《山の音楽家》・《かえるの合唱》)、5歳児の最高音もC5が1曲(《まつぼっくり》)、B4が1曲(《空にらくがきかきたいな》)、B♭4が2曲(《きのこ》・《こぎつね》)、A4が1曲(《かえるの合唱》)であり、第1回調査よりもかなり低くなっている。最高音以外の曲全体の音高もかなり低くなっている。

これらの曲の開始音・最高音・終止音を評価の対象とした。それらを表3に示す。

表3 第2回調査の歌唱の評価箇所とその音高

4歳児	《まつぼっくり》			《山の音楽家》			《大きな栗の木の下で》		
	開始音	最高音	終止音	開始音	最高音	終止音	開始音	最高音	終止音
	D4	A4	D4	A3	A4	D4	B♭3	B♭4	B♭3
	《だれの手》			《かえるの合唱》					
開始音	最高音	終止音	開始音	最高音	終止音				
	G4	C5	C4	C4	A4	C4			
5歳児	《きのこ》			《まつぼっくり》			《空にらくがき…》		
	開始音	最高音	終止音	開始音	最高音	終止音	開始音	最高音	終止音
	A4	B♭4	F4	F4	C5	F4	E4	B4	C4
	《こぎつね》			《かえるの合唱》					
	開始音	最高音	終止音	開始音	最高音	終止音			
	B♭3	B♭4	B♭3	C4	A4	C4			

2) 第2回調査の曲別の検討

第2回調査の結果を年齢別に示す。まず、4歳児を示す。

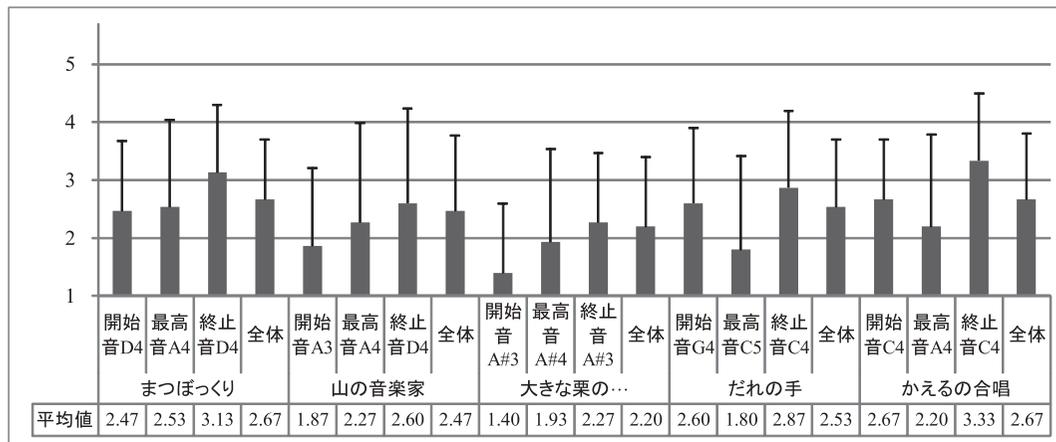


図6 第2回調査の4歳児の曲別の平均値と標準偏差

ポイントが最も低いのは、《大きな栗の木の下で》の開始音 B \flat 3 (図では A#3) の 1.40 である。この音高は、ほとんどの幼児にとって、発声するには低すぎる音高である。これは、保育士たちが筆者たちの要望に沿うために変口長調に移調したためである。《山の音楽家》の開始音 A3 の 1.87 もこれと同様な要因によってポイントが低くなっている。これらの低すぎる音高を除くと、最もポイントが低い音高は、《だれの手》の最高音 C5 の 1.80 である。つぎにポイントが低いのは、《かえるの合唱》の最高音 A4 の 2.20 であった。

ポイントが高い音高は、《かえるの合唱》の終止音 C4 の 3.33 であり、つぎに《まつぼっくり》の終止音 D4 の 3.13 であった。

つぎに、5歳児を示す。

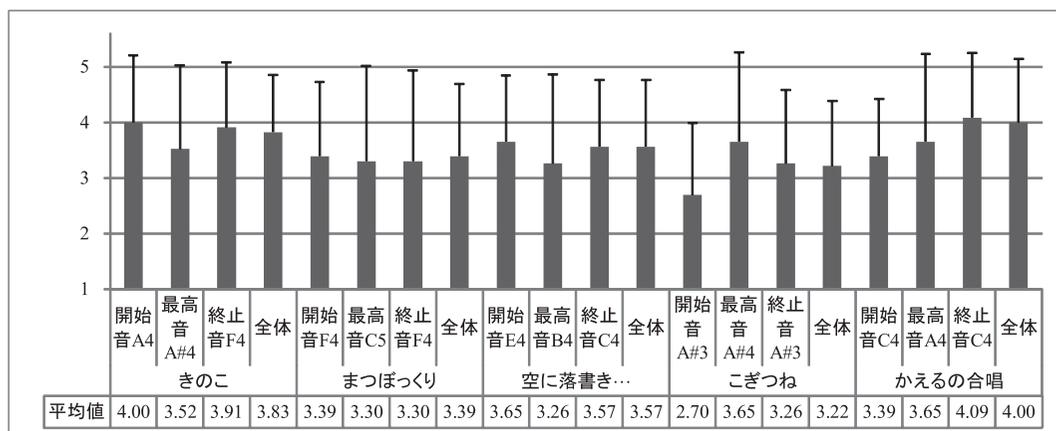


図7 第2回調査の5歳児の曲別の平均値と標準偏差

ポイントが最も低いのは《こぎつね》の開始音 B \flat 3 (図6・7では A#3) の 2.70 である。この音高も上記と同様に、筆者たちの要望に沿うために移調したために低くなったものである。それ以外でポイントが低いのは、《きのこ》の最高音 B \flat 4 (図では A#4) の 3.52, 《まつぼっくり》の最高音 C5 と終止音 F4 の 3.30, 《空にらくがきかきたいな》の最高音 B4 の 3.26, である。

ポイントが高い音高は、《かえるの合唱》の終止音 C4 の 4.09, 《きのこ》の開始音 A4 の 4.00 である。《かえるの合唱》の最高音 A4 も 3.65 であり、低いポイントではない。

全体ポイントは、その曲全体の歌声を評価したものである。その曲別の全体ポイントを検討すると、《かえるの合唱》(4.00) > 《きのこ》(3.83) > 《空にらくがきかきたいな》(3.57) > 《まつぼっくり》(3.39) > 《こぎつね》(3.22) となっている。最高音を低くするために移調して低い音域となった《こぎつね》を除外すると、最高音が最も高い《まつぼっくり》のポイントが最も低く、逆に、最高音が最も低い《かえるの合唱》のポイントが最も高くなっている。

3) 4歳児と5歳児の比較：《かえるの合唱》

つぎに、4歳児と5歳児を比較する。4歳児と5歳児が共通して歌った《かえるの合唱》についてのみ比較する。

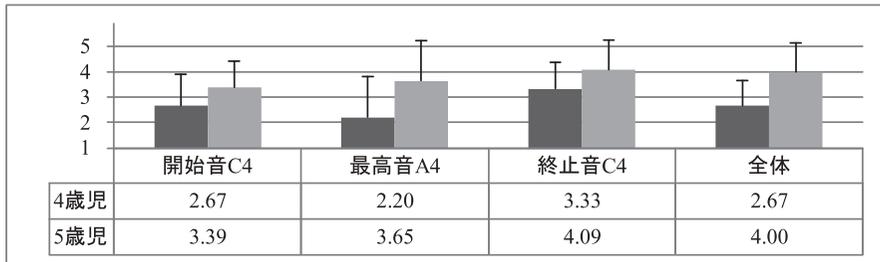


図8 4歳児と5歳児の比較：《かえるの合唱》

第2回調査でも、5歳児のポイントが4歳児よりも顕著に高くなっている。その差は、最高音 A4 (1.45) > 全体 (1.33) > 終止音 C4 (0.76) > 開始音 C4 (0.72) となっている。5歳児は開始音 C4 (3.39) よりも最高音 A4 (3.65) の方がポイントが高いが、4歳児は、逆に、開始音 C4 (2.67) よりも最高音 A4 (2.20) の方がポイントが低くなっている。4歳児は、前述した地声から頭声への声区の変換が不十分なためであると考えられる。

4) 第2回調査の個人別の検討

第2回調査の結果を年齢別・個人別に示す。

まず、4歳児を示す。

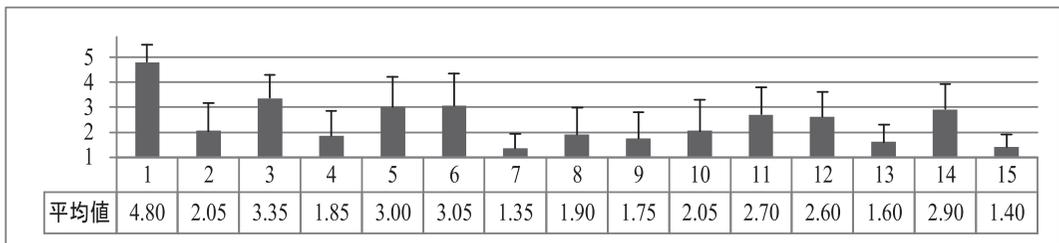


図9 第2回調査の4歳児の個人別の平均値と標準偏差

低ポイント群 8名 (1.35～2.05 ポイント), 中ポイント群 6名 (2.60～3.35 ポイント), および高ポイント群 1名 (4.80 ポイント) に分かれる。低ポイント群は「monotone」である。

つぎに、5歳児を検討する。

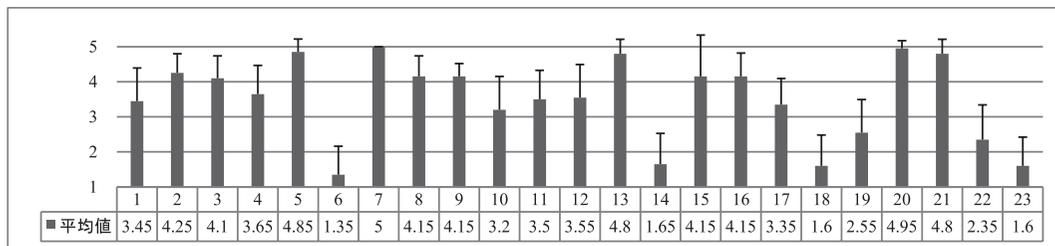


図 10 第2回調査の5歳児の個人別の平均値と標準偏差

5歳児でも、低ポイント群6名(2.55ポイント以下)、中ポイント群12名(3.20～4.15ポイント)、および高ポイント群5名(4.80ポイント以上)に分かれる。低ポイント群の6名は「monotone」であり、1ポイント台の4名は強度の「monotone」である。標準偏差の大きい中ポイント群の15は、ほとんどの音高で指定された音高を発声できているので、少しのきっかけで高ポイント群に移行することが可能である。

4 2つの調査の比較

8月2日の第1回調査と11月15日の第2回調査を比較する。

(1) 評価箇所全体の比較

第1回調査では、3曲の、①開始音、②最高音、③終止音を対象として、4歳児では9箇所、5歳児では8箇所の音高について、正しいピッチで歌えたかどうかを5件法(5=正しいピッチで歌えた、……1=正しいピッチで歌えなかった)で判定した。第2回調査では、4・5歳児とも、すべての曲5曲の、①開始音、②最高音、③終止音、および④全体、計20箇所を5件法で判定した。第1回調査の対象者は、4歳児13名、5歳児20名であった。第2回調査の対象者は、4歳児15名、5歳児23名であった。図11は、これらの対象者のすべてのポイントの平均値と標準偏差である。

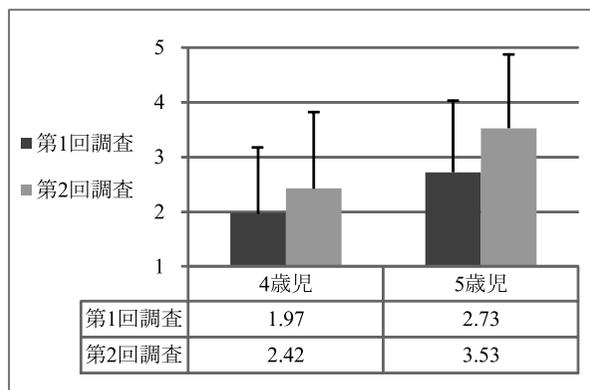


図 11 2つの調査の比較：全対象者の全評価箇所の平均値と標準偏差

4歳児・5歳児とも第2回調査の平均値は、第1回調査に比して、大きな伸びを示している。4歳児の伸びは0.45、5歳児の伸びは0.80であり、5歳児の伸びの方が非常に大きい。

この大きな伸びの要因として、まず、最高音の音高が低くなったことが考えられる。さらに、単に最高音が低くなっただけでなく、全体的な音高も低くなったことも、この大きな伸びに寄与したと考えられる。ただ、筆者たちの想定外だったことは、筆者たちの要望に沿って最高音を低くするために、あまりにも低い調へ移調した(例えば4歳児では、記譜上ではト長調の《山の音楽家》をニ長調に移調して、もとの

最高音 D5 を A4 に低くしたのであるが、そのために最低音がもとの D4 から発声しにくい A3 になってしまったこと) ことである。この点に関しては、最高音を指示するだけでなく、音域についても具体的に指示すべきであった。

つぎに、10 月から実施した「なまえよびあそび」と「なきまねあそび」の効果が推測できる。この「なまえよびあそび」と「なきまねあそび」の優れている点は、子どもが 1 人ずつで歌う機会が圧倒的に増えるために、子どもが自分自身の歌声を明確に自認できることである。

(2) 《かえるの合唱》の全体の検討

《かえるの合唱》だけが、2 つの調査で、両年齢で歌われた。これを年齢別・調査別に検討する。第 1 回調査で欠席した 4 歳児 2 名と 5 歳児 3 名は除外されている。

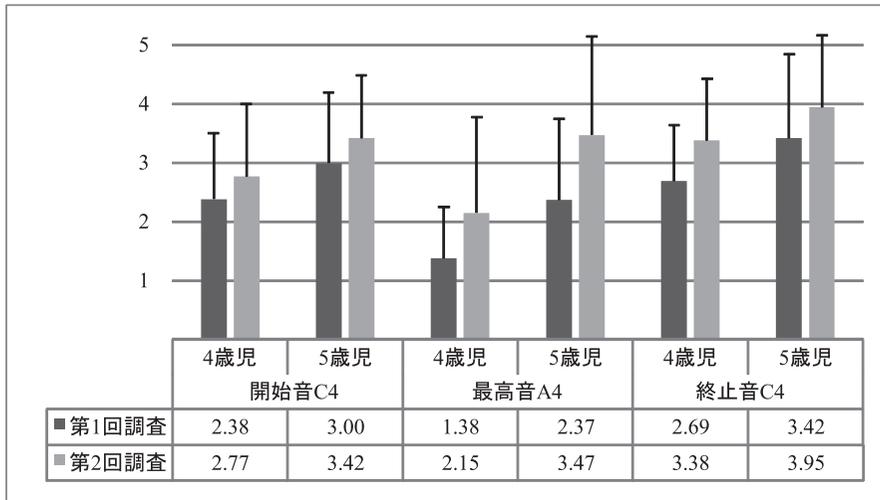


図 12 《かえるの合唱》の全体の検討

上図をみると、両年齢とも、《かえるの合唱》のすべての評価箇所、第 1 回調査よりも第 2 回調査のポイントが伸びている。ポイントの伸びは、4 歳児では、最高音 A4 (0.77) > 終止音 C4 (0.69) > 開始音 C4 (0.39) となっており、5 歳児では、最高音 A4 (1.10) > 終止音 C4 (0.53) > 開始音 C4 (0.42) となっている。両年齢とも最高音 A4 の伸びが最も大きかった理由は、第 1 回調査での最高音 A4 のポイントが最も低かったからである。

音高別に検討すると、5 歳児では、第 1 回調査では、各評価箇所間に、終止音 C4 (3.42) > 開始音 C4 (3.00) > 最高音 A4 (2.37)、とかなり大きな差が見られたが、第 2 回調査では 3 つの音高に大きな差はなくなっている。しかし 4 歳児では、第 1 回調査では、各評価箇所間のポイントは、終止音 C4 (2.69) > 開始音 C4 (2.38) > 最高音 A4 (1.38) となり、最高音 A4 のポイントが非常に低かった。第 2 回調査でも、終止音 C4 (3.38) > 開始音 C4 (2.77) > 最高音 A4 (2.15)、となっており、第 1 回調査の傾向がそのまま残されている。つまり、声区の変更が円滑に行われていないことが明らかとなった。

(3) 個人別の検討

1) 4 歳児の検討

図 11 のポイントを個人別に比較する。第 1 回調査を欠席した 2 名を除外した、13 名のデータである。

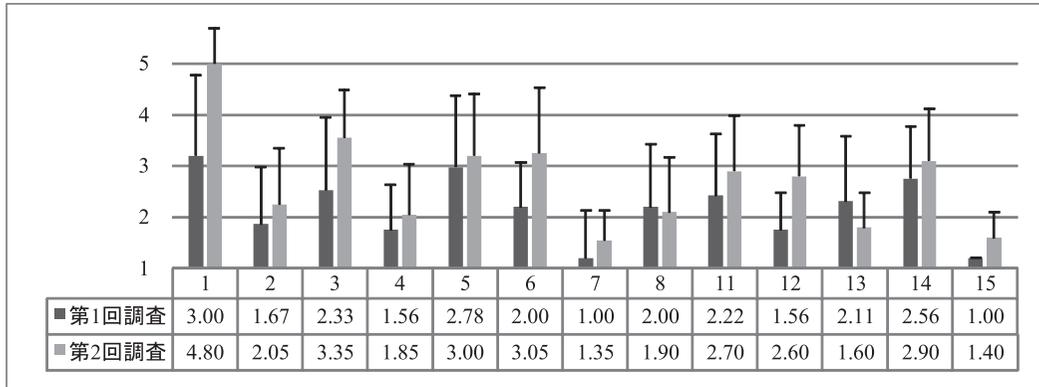


図13 4歳児：2つの調査の比較

4歳児は、第2回調査で顕著にポイントが改善している。第1回調査よりも第2回調査でポイントが向上している幼児が13名中11名(85%)いた。つぎに、個人別に検討する。No.1は最も向上が顕著であり、1.80ポイント伸びている。No.3と6も1ポイント伸びている。No.7と15は第1回調査で monotone と判定されていたが、第2回調査でもそこから脱してはいない。これら2名のポイントがわずかに伸びているのは、第2回調査では第1回調査にはなかったA3等の低い音高が含まれており、それらの音高にたまたま地声一致したためである。これらの2名の幼児に加えて、No.2, 4, 8, および13の4名も monotone から脱し切れていない。この6名には、適切な個別の指導が必要である。例えば、彼らの地声に近い低い音高で「なまえよびあそび」と「なきまねあそび」をして、保育者の歌いかけた音高(ピッチ)と同じ音高(ピッチ)で歌えたという感覚を幼児に体験させる活動等が必要である。

つぎに、第1回調査と第2回調査で、4歳児と5歳児が共に歌唱した《かえるの合唱》を検討する。

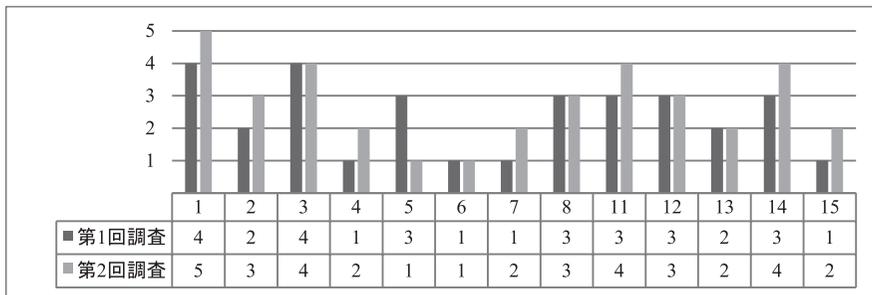


図14 4歳児の2つの調査の比較：《かえるの合唱》開始音 C4

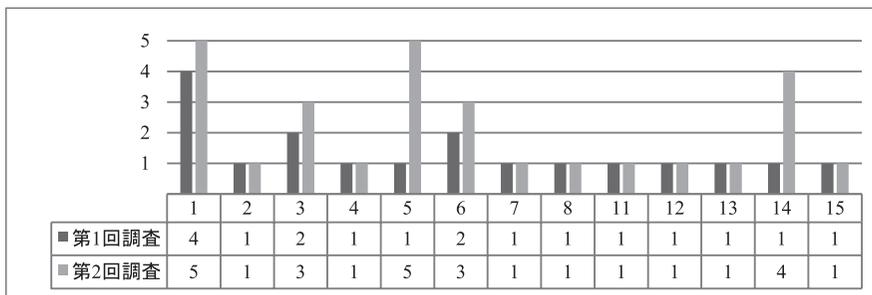


図15 4歳児の2つの調査の比較：《かえるの合唱》最高音 A4

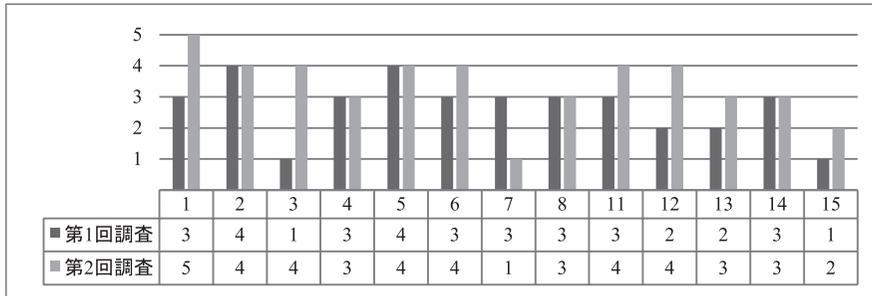


図 16 4 歳児の 2 つの調査の比較：《かえるの合唱》終止音 C4

4 歳児では、《かえるの合唱》の開始音 C4 の第 2 回調査のポイントが伸びた者が 7 名（54%）、終止音 C4 でも第 2 回調査でポイントが伸びた者が 7 名（54%）いた。最高音 A4 では、第 1 回調査ではほとんど monotone 状態であった No.5 と 14 のポイントが大きく伸びている点に注目したい。しかし、逆に 8 名（62%）が最低ポイントのままであった。最高音に関しては、改善点はほとんどなかったと言える。この点に非常に大きい課題を残したといえる。

2) 5 歳児の検討

図 11 のポイントを個人別に比較する。第 1 回調査を欠席した 3 名を除外した、20 名のデータである。

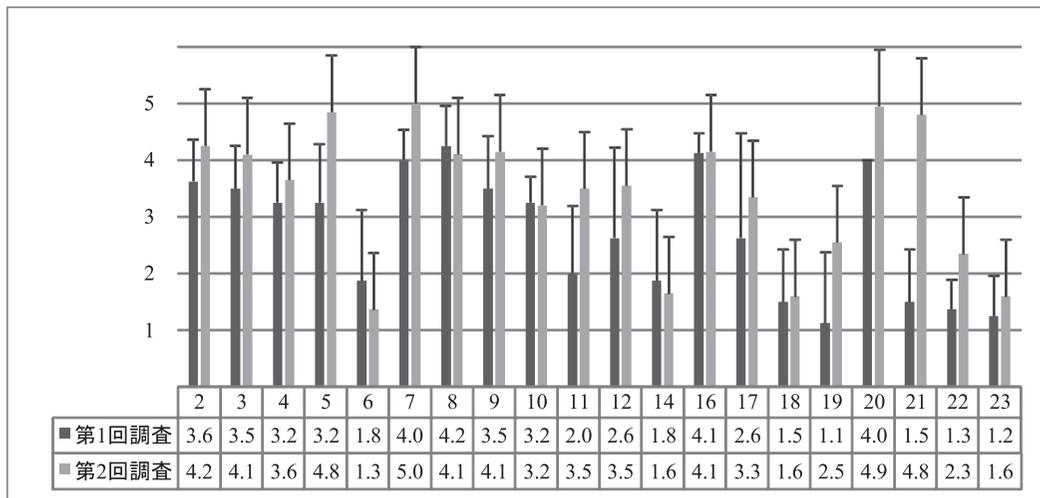


図 17 5 歳児：2 つの調査の比較

5 歳児では、第 1 回調査よりも第 2 回調査でポイントが向上している幼児が 19 名中 16 名（84%）いた。しかし、第 2 回調査でもポイントが低迷している No.6, 14, および 18 の 3 名への対処が急務である。つぎに、《かえるの合唱》を検討する。

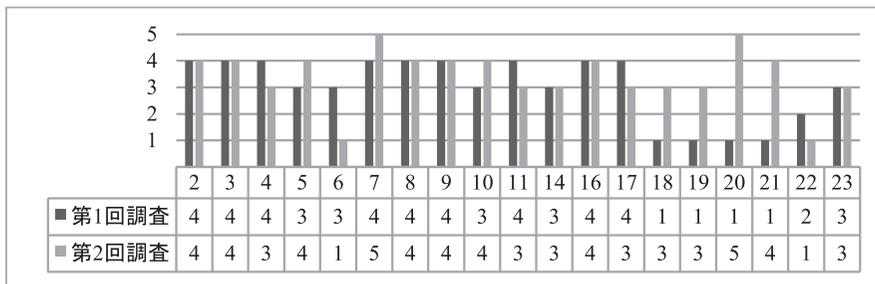


図 18 5歳児の2つの調査の比較：《かえるの合唱》開始音 C4

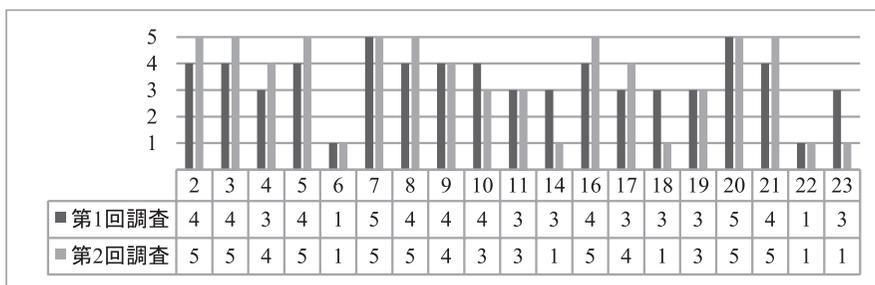


図 19 5歳児の2つの調査の比較：《かえるの合唱》最高音 A4

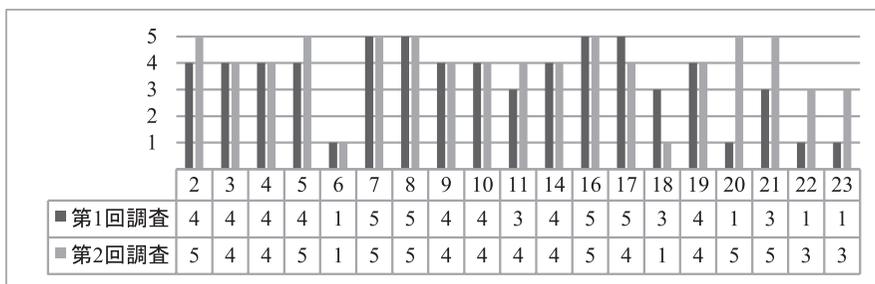


図 20 5歳児の2つの調査の比較：《かえるの合唱》終止音 C4

5歳児の《かえるの合唱》の開始音 C4 では、No.6 と 22 以外の 18 名において、第 2 回調査のポイントが第 1 回調査と同じか伸びている。最高音 A4 では、13 名において、第 2 回調査のポイントが第 1 回調査と同じか伸びている。終止音 C4 では、No.18 以外の 19 名において、第 2 回調査のポイントが第 1 回調査と同じか伸びている。このように 5 歳児の第 2 回調査での伸びは著しい。

5 おわりに

このように、第 2 回調査では顕著なポイントの向上がみられた。2 回の調査で共通して歌った《かえるの合唱》の場合も同様である。この要因としては、第 1 に、最高音 D5 を除外した教材曲を選択したことが挙げられる。D5 という音高は、幼児にとっては歌唱するには困難な音高である。小学校低学年でも同様である。筆者の研究によれば、幼児の声域は、4 歳児では A3 ~ G#4, 5 歳児では A3 ~ B4 である¹⁾。(本研究の結果から、A3, B♭3 は、実際の歌唱場面では歌うことが困難であると示唆された。) それにもかかわらず、この D5 の音高が幼児用の教材曲集に普通に見られるのが現状である²⁾。したがって、保育者が子どもの歌声の実態を把握し、歌唱能力や現状に応じて、教材曲を移調して用いる等の工夫が必要である。その一方で、幼児用の実践的な教材曲集は、作曲者が D5 を特定した場合を除いて、例えば、アメ

リカ曲の《メリーさんのひつじ》の場合には、ト長調で記譜する必要はまったくないのである。子どもの歌声の実態を知れば、ハ長調かニ長調が適切である。子ども全員がハ長調あるいはニ長調で歌えるようになったことを確認してはじめて、より高い調で歌うようにすべきである。

第2回調査で顕著なポイントの向上がみられた第2の要因として、「なまえよびあそび」と「なきまねあそび」を意図的に練習したことも考えられる。「なまえよびあそび」は、幼児が全員で歌うのではなく、名前を歌いかけられた特定の幼児が「はあいV」と歌って返事する活動である。短時間に多くの幼児がソロで歌うことになる。つまり、本人が自分の声を確認できる機会を与えられることになるのである。「なきまねあそび」も同様に、動物や鳥や虫の名前を歌いかけられた特定の幼児が、ソロで「なきまね」を歌う活動である。これらの活動を、ほぼ、週に2～3回行った効果が現れたと考えられる。

しかし、課題も残されている。いわゆる「monotone」の問題である。今回の9月以降の活動でも、この問題を克服することはできなかった。上記のポイントの伸びは、「monotone」以外の幼児の成果であって、「monotone」の幼児の伸びは低いままであった。この問題を克服するための具体的な方策を、国吉光徳保育園の先生方と共に追求したい。

参考文献

- 1) 吉富功修, 三村真弓編著 (2012) 『改訂2版 幼児の音楽教育法-美しい歌声をめざして-』 ふうろ出版, pp.3-12。
- 2) 吉富功修 (1980) 「幼児の声域と幼稚園歌唱曲の関連について」 『愛媛大学教育学部紀要 第1部 教育科学』 第26巻, pp.137-148。